

文は漢文突厥文及びソグド (Sogd) 文の三體より成り、其中漢文を記せる碑石は破碎して六大片〔二〕となり居れど、文字最も好く保存せらるれば、Deveria 氏は先づ其の解釋を試みて前記 Heikel 氏の書中に載せ、其の後露西亞の Radloff 氏は、一八九一年また此の地に旅行して同一の碑を拓し、且つ其の二片を持ち歸りしが、一八九五年 Die alttürkischen Inschriften der Mongolei を公にするや、駐露支那公使 Shu King-cheng (許景澄) 氏に囑して之を讀ましめ、Wassilief 氏は之を解釋して同書中に載せたり、翌一八九六年には、別に Radloff 氏の依囑によりて、Schlegel 氏は Die chinesische Inschrift auf dem uigurischen Denkmal in Kara Balgassun を著はし、詳細なる解釋を施したり、其の後此の碑文の研究は大に進歩するには至らざりしが、一九一三年に Chavannes, Pelliot 兩氏が Un traité manichéen retrouvé en Chine なる論文中に、此の碑文中の摩尼教に関する一節に解説を加ふるに至れり、兩氏の解説は從來の學者の研究の誤れる所を指摘し、補正を試みたるものにして、曰ふ迄も無く最も卓絶せるものなれども、惜むらくは其の全部に及ばず、突厥文及びソグド文を以てせるものは、殆んど全部損はれて讀解し難く、従て突厥文のものは從來只 Radloff 氏が其の一小部を前記の書中に解釋したる外、研究の加へられたるもの無く、ソグド文のものも同氏が Das Kudatku Bilik. (Theil I. S. LXXXV) に於て、之を回鶻文と見て僅に數行の解釋を試みしのみなりしが、一九〇九年に至り、獨逸の F. W. K. Müller 氏が Ein iranisches Sprachdenkmal aus der nördlichen Mongolei なる論文に於て、始めて其のソグド文なることを確め、數行の字句に就きて譯述を施したる外は、絶えて研究の發表せられたるものなし。

此の碑は題銘によれば回鶻の愛登里囉汨沒蜜施合毗伽可汗、即ち突厥文字にて記せる Tängridä qut bulmıs alp